

---

# ピアノ

ネーマ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ピアノ

### 【Nコード】

N5010BA

### 【作者名】

ネーマ

### 【あらすじ】

ネーマ倶楽部発行の同人誌からの転載です。

気がついたのは二週間ほど前だった。

風もないのに道路からの目隠しに植えてある樹木が揺れるのである。

最初は野良猫でも出入りしているのかと思ったが、それにしても位置が高過ぎた。

しかも自分が立ち上がったたり、室内を移動すると葉の揺れがさらに激しくなり、それからピタリと止まる。風や動物の仕業とは思えなかった。

近所の子供かしら、という考えは即座に却下された。

木の葉の揺れる位置が、子供にしては高い場合があるのだ。台にでも乗ってないとあの高さから覗くことはできないだろう。そう、揺れる樹木の正体は大人だ。

どうやら覗きをしている、大人がいるらしい。  
が、それだけだ。

それ以上何かをするつもりはないらしい。  
強盗や空き巣の下調べなら日の高い時間には行わないだろうし、少なくとももつと人目を避けるだろう。別のその類いの訓練を受けているわけでもない自分にも、誰かが潜んでいることがわかるのだ。いったい誰だろう。

子供ではないことはわかってるし、悪戯の類いにしては回数が多い。しかも黙って覗いているだけだ。

これが風呂場を覗かれているのなら、一回でも十分だし、父親なり警察になり連絡をしただろう。

だが人に見られて困るものではないし、窓を開けているのは自分の意志だ。

外に向かって叫んでみることも考えたが、相手が逃げてしまっておしまいだろう。追いかけても、自分が外に出る間に追いつかれな

いところまで逃げられているに決まっている。それに何と言って叫べばいいのだろう。

「泥棒」でもないし、「痴漢」というのも大げさだ。

誰かに頼む、という選択肢もあったが、さすがに女友達にそんなことは頼めない。

これはやはり家族に相談してみるべきだろうか、でも事が大きくなりそうだし、本気でそんなことも考え始めた時にちよつとしたハプニングが起こった。

最初に木の揺れを野良猫だと思ったように、このあたりには何匹か住みついているらしい。

それが二匹、追いかけてこをしてお庭に紛れ込んできた。

猫が騒がしいのはたまにあることだから、すぐに追い払ったりはしない。しばらくは芝生の上でくんづぼぐれつしていたが、劣勢が確定した茶色の猫が逃げ出した先が、不穏な動きを見せる樹木の根元だったのだ。

「うわっ」

「声、出すなっ」

「馬鹿っ」

バサバサと木が揺れ、男の声がした。若い男の声だ。

「誰なのっ」

窓枠に手を突き、外へと身を乗り出して叫ぶと、ガサガサと木の揺れる音が大きくなり、続いて駆け出す複数の足音が道路に響く。

わかったのはやはり覗いていたのは数人の男性らしいことだけだった。そう思って猫が駆け抜けたあたりを見ると、何かが光った。

「何かしら……」

玄関から外に出て庭に回る。

木の枝に引っかけられているそれを引っ張り出すと、それは士官学校の制帽だった。日に反射して光ったのは留めつけてある校章で、

名前までは書いてないが、裏に入学年度が彫り込んである。

それが一目で士官学校の校章だとわかるのは父親がその事務長をしているからだ。

「どうしたんだ？ そんなところだ」

「何でもないわ。おかえりなさい。今日は早かったのね」

ジェシカ・エドワーズは咄嗟にスカートの影に制帽を隠した。

「あんなところで声出すヤツがあるか」

「ごめん、ごめん、猫にびっくりしてつい……」

「寿命が縮まったぞ」

訓練の時でもここまで全力疾走しないだろう。

角を三つばかり曲がり、誰も追ってきてないことを確かめて、それから物陰にへたり込む。

「見られたかな」

「いや……それは大丈夫なはず」

額を流れる汗を手の甲で拭いつつ、とりあえずは逃げ切ったことに安心している中、ジャン・ロベール・ラップだけは青ざめていた。

「俺」

「……？」

どうしたんだ、という言葉が口から出かけたが、彼の頭を見れば何があったのか一目瞭然だった。

探しに行く、という案も出たが、ただちに却下された。

これまでも覗きがバレているのではないかという懸念はあったが、今日はつきりと知られてしまったのだ。

制服も制帽も、名目上では貸与されたものである。無くしましたと簡単に売店で購入することはできない。

帽子には予備があるから、今日明日でバレることはないが、式典の時には服装の点検は厳しい。外で落とした、だけでも問題なのに、それが覗きをしていたとなると、どんな懲罰を受けることになるか。夜になり、あたりが暗くなってから万が一の望みをかけてこっそり

り見に行った。

繁みにしゃがみ、帽子が落ちていそうな箇所の手を伸ばす。あまり動くと葉音が大きくなるので慎重に手探りで芝生の上を探った。

「どうだ……あるか？」

「いや……ない……」

「もつと横じゃないのか？」

「だんだんゴソゴソ音が大きくなっていく。」

「あの……」

見張り役を割り当てられていたヤンが制服の裾を引っ張った。

「しっかり見張ってる」

「大声出すな」

その声の方が大きいと思うのだが、ヤンは黙って再び制服の裾を引いた。

「いったい何だ」

ようやくラップが振り返る。

「さっきお前が覗いてた位置を考えたら、庭には落ちないと思うんだが」

「！」

ガサゴソ大きくなり始めていた雑音がピタリと止まる。

無言で見つめ合い、念のためにそつと頭より少し低い位置の木の枝も探ってみた。

逃げる途中に落としたのなら、一番後ろを走っていたヤンが気づいたろう。幾つか考えた中で、もつとも可能性が高いのは、木に引っ掛かっていたところを住人に拾われてしまった、というものだった。

名前こそ書いてないが、入学年度がわかるのだから、持ち主はその気になれば即座に調べられるだろう。

その晩、ラップはろくに眠ることができなかった。それはラップだけでなく、ヤンや他の者も同様だった。

しかし呼び出しはなかった。

落とした場所はほぼ確定している。

しばらくは予備の帽子でもいいが、このまま卒業まで学校側にバ  
レないわけがない。

同室なだけ、ヤンにはラップが迷い、悩んでいることがよくわか  
る。

制帽があの家に住人の手にあることはほぼ確実なのだ。

自分らが覗いていたことも無論バレている。

物を壊したわけでもないし、法に触れるほどの行為ではないが、  
士官学校の学生としては褒められた行為ではない自覚もあった。

二人は幾度も鏡を見てチェックをした。

式典前の服装チェックでもこれならば満点なのを確認する。減点  
があるとすれば、ラップの制帽に校章がないことだけだろう。

ラップが一人で行くのは心細いから、とヤンを誘った。

ヤンはたまたま制帽を落としたのがラップだっただけで、自分も  
同罪だと思っている。あの時、木の枝に帽子を引っ掛けたのはヤン  
だったかも知れないのだ。

どちらが呼び鈴を押すか、しばし無言の押し問答があり、結局は  
主役であるラップが押した。

父親はまだ学校にいることは確かだが、母親が在宅かも知れない。  
二人の祈りが通じたのか、出てきたのはジェシカだった。

「あ、あの……」

「こんにちは……」

言いながらヤンは制帽の下に手を入れてばりばり頭を掻いたので、  
きちんと被ってきたのがずり落ちそうになる。

「ヤンッ」

気づいたラップが横からそれを押さえにかかった。ヤンも帽子の  
下から手を引っ張り出す。

ジェシカは俯いて小さく笑いを漏らした。

「ジャン・ロベール・ラップです」

「ヤン・ウェンリーといいます」

極度の緊張で声が震え、おまけに語尾がひっくり返る。

「いらつしゃい。お待ちしてました」

二人とは反対に、ジェシカは落ち着き払って答え、室内に入るように二人を促した。

「え……でも……」

「そこにいたら、外を歩く人に見られてしまうわ。早くドアを閉めて」

「は、はい」

慌てたのでドアを閉める勢いが強く、ボタンと大きな音がした。ジェシカはくすりと笑い、まだぼかんとしている二人を奥の部屋へと誘う。

「コーヒーでいいですか？」

「はい。な、何でもいいです」

案内されたのは二人が見慣れた部屋だった。

庭に面した大きな窓とピアノ

窓からは彼らが覗き見て

いた繁みが丸見えで、ソファに腰掛けた二人が目やり場に困っていると、トレイにコーヒーを乗せたジェシカが入って来た。

「……！」

トレイに乗せられているのはコーヒーカップだけではない。ラップの制帽がちょこんと乗せられている。

「どうぞ」

くすくす笑ってジェシカは二人の前にコーヒーカップを並べ、少し考えてからラップの方へ帽子を置いた。

「取りにくるのをお待ちしていました」

並んで座っている向かいに座ると、自分の分なのだろうマグカップをテーブルに置き、人形のように固まっている二人に、よければ砂糖とミルクをどうぞと勧める。

「ヤンのだとは思わなかったんですか？」

自分の手元に帽子を手繰り寄せながらラップが尋ねた。



「だって校章がついていなかったでしょう？」

二人とも室内に入る時に帽子は脱いでいるから、玄関先でのやり取りの間にそれを確認されたのだ。言われてみればなるほど、という理由である。

「どうしてお父上に帽子を渡さなかったのですか？」

室内に迎え入れられたことよりも謎だったことを尋ねたのも、やはりラップだった。

「私が帽子を拾った直後に帰宅したけれど……咄嗟にスカートの影に隠したの」

ふふっ、と悪戯する子供のような笑みを浮かべるジェシカをまともに見ることができず、二人は同時にコーヒークップに手を伸ばした。

「だって渡してしまうと、あなた達が叱られるでしょう？」

覗きの犯人と、落し物の拾い主という関係のせいもあるが、彼らは完全にジェシカの掌中あり、二人とも口に含んだコーヒーを吹き出さないことで精一杯だった。

「大切な制帽を落としたことも、だし……」

「すみませんでしたっ」

いきなりラップが立ち上がり、垂直に腰を曲げてお辞儀をしたことに、ジェシカだけでなくヤンも驚く。

「悪いことだとわかっていたんですが、止められなくて。最初は事務長の娘が美人だという噂で、それを確かめにきたら、ピアノの音が……」

そこまでは立った勢いがあつた。が、投げたボールが徐々に失速するように言葉は歯切れ悪くなり、ジェシカを見ていた視線も床へと落ちていく。

「ピアノが、あまりに……素敵だったし……その……」

ラップの援護しようと続いて立ち上がったヤンであるが、普段から射撃の成績は超低空飛行だけに、ほとんど援護としては役立たなかった。

「窓が開いているから、庭の外からでも……よく聞こえるし……その美人なのも噂ではなくて、真実なのがわかって………ついつい覗きのようなことをしていました。本当に申し訳ありませんでした」

僅かな間でも息がつけたのか、再びラップは戦線に復帰を果たし、最後の謝罪にはヤンも声を揃え、二人して深々と頭を下げたので、ジェシカには彼らの後頭部しか見えないほどだった。

「私のピアノ、そんなに気に入ったんですか？」

やがて聞こえてきた声は柔らかく、制帽を落としてから冬の木枯らしの中にいた二人には春の日差しのような暖かさが感じられた。

「だったら、中で聞いてくれてもよかったのに」

誰かが外から覗いている。

いったい誰だろう、という謎は落し物で解けた。

個人が特定できなくても、士官学校の学生であるとわかれば、その理由も推測できた。

事務長の娘が美人、という噂は面映くはあったが、その出所が誰あろう自分の父親らしい、という噂もあり、それを確かめに学生が覗きに来たのはこれが初めてではなかったのだ。ただ外出するところなどを一度見れば好奇心は満たされたく、今回のように続いたのは初めてだった。

ラップの言葉は本当だろう。

窓を開けてピアノを弾いているのだから、外からでも自分の姿は簡単に見ることができる。学生が入れ替わり立ち代り、

噂を確かめにくることもあるが、それは必ず新生が入学した時期だった。今はその時期でもない。

音楽は好きだが、音楽家になるほどの才能が自分にはないことは知っている。窓を開けたままでピアノを弾くのは気持ちよかったからだ。

落し物を父親に渡せば、覗きの理由が何であろうと、噂を流しているのが父親だとしても、彼らは叱られるに違いない。覗きをしていたことと、制帽を落としたことで二重に。

好奇心は満足しているはずなのに、どうして毎日のように来るのか、その理由が知りたくなり、きつと制帽を取りにやってくるだろうと待つことにした。

不注意で無くしました、で簡単に事が済む品ではないのだから。

二人で来たのは、一人では心許なかったからだろう。その気持ちわかる。もしも自分が同じ立場なら、やはり仲良しの友人に同行を頼んだだろう。

「ジェシカ、誰か来ているのか？」

玄関のドアが開く気配には、三人ともまったく気づいていなかった。

「ええ、士官学校の方が」

ジェシカが父親をも室内に招き入れる。

彼女の返答に驚くが、制服姿では言い逃れもできないのだし、二人はまたしても固まり敬礼するのがやっとだった。

「私が落とした楽譜を届けて下さったのよ」

続く言葉にヤンは目を見開き、ラップは瞬きの回数が不自然なほど激増する。父親の訝しげな視線と二人の様子に気づき、ジェシカは急いで付け加えた。

「親切な方達でしょう？ お父さんからもお礼を言ってくださいな」  
テーブルの上に出されている来客用のコーヒークップにもちらりと視線をやり、それからもう一度二人をまじまじと見やる。

「それは娘が世話になった」

いかにも事務的に、儀礼的に謝礼の言葉を述べた、という声色だった。学生は二人だが、ソファに制帽が三つあることに気づいたかなのか、楽譜を届けただけで部屋にあげてコーヒーを振舞っていることが気に入らないのか ヤンは後からその時のことを思い出したが、もちろん尋ねることはできなかった。

ジェシカの中では、落とし主がいる間に父親が帰ってくることも予想済みで、その為の言い訳まで用意してあったのだ。

「せっかくだから、聴いていってくださいね」

父親が部屋を出ていくとジェシカが笑顔で二人に座るように言い、楽譜を手にピアノに向かう。

指先から奏でられたのは、いつも庭の外から彼女の横顔を盗み見しながら聞いていた曲だった。

二人とも朝礼に出ている時のように背筋を伸ばし、膝の上に握った拳を置いて曲に聞き入った。音楽を楽しむというよりも訓示を聞いているといった表情のままで。

時折ジェシカはその様子をちらりと見て、楽しそうにピアノを弾き続けた。

「庭の外から見てみると、道を通る人に怪しく思われるから」

ジェシカは二人に、またいつでも訪ねてくれてかまわないと言って見送ってくれた。

その後、ラップはしばしばヤンを誘い、ジェシカを訪ねた。

ピアノを聴きたいから、という言葉はだんだん口実になっていった。聴いている時間よりも会話している時間が長くなり、ヤンが誘われる回数が減っていく。

だがヤンは自分一人で彼女を訪問することはなかった。

ラップが正式に交際を申し込み、ジェシカがOKしてくれたとの報告を聞かされたのは、それから一年後だった。

（後書き）

ヤンもジェシカのが好きだったらしい描写は原作に出てきます。エンサイクロペディアにもヤンの初恋の相手、と紹介されていますし。

ただフレデリカへのプロポーズもあんなだし、それまでに何か行動に移したような描写はないです。まあ、提督のそんなところも好きなのですが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5010ba/>

---

ピアノ

2012年1月13日22時54分発行